臨 床 報 告

腎 盂 乳 嘴 腫 の 1 例

One rare example of the renal pelvic papillome.

國・立 福 知 山 病 院

厚生技官 醫學士 神 谷 五 郎

Kamiya Goroh

(1) 緒 論

腎盂腫瘍の原因に關しては、諸説が行はれ、絨毛腫、畸形腫の外、腎盂の乳嘴腫を見ることがあり。文献を按ずるに悪性腎臓腫瘍中グラヴィッツ腫瘍は 80% で最も多く、腎盂の腫瘍は腎臓腫瘍よりも稀れにして 30 歳より 60 歳に發生すること多しと記されたり。文献及び解剖學上より腎盂の乳嘴腫を分類せば 3 種なり。即ち (1) 良性乳嘴腫、(2) 悪性乳嘴腫、(3) 乳嘴狀癌。之れら 3 種間には互に移行あり。殊に前 2 者は病理解剖的の區別は屢々困難にして唯臨床的に多發性なるを以て悪性乳嘴腫と成すものなり。而も之等の乳嘴腫は又屢々絨毛癌に變性する事あり。良性乳嘴腫が後日癌腫變性を成すこと稀ならず。以上の如くこの腫瘍は初期久しく良性に經過し發育緩慢にて、容易に手に觸れず、従つて早期診斷が困難なり。故に我々臨床家はその早期發見と原因の排除による根治療法、或はそれが不可能なれば、手術による腎剔除を試むべきなり、自分は症狀、經過並に檢鏡上よりみて、興味ある 1 例を認めたるにより報告する次第なり。

(2) 症 例

我妻武司 ♂ 35 歳
初診 昭和 21 年 5 月 15 日
主訴 血尿時々、左腎臓部痛、全身倦怠、左腰痛、尿意頻數
家族歴及遺傳的には特記事項を認めず。
既往症、生來頑健なるも 30 歳の時結核性腹

膜炎並に左濕性肋膜炎罹患、32 歳より自宅療養開始、泌尿器系疾患及性病は總て否定す。

現病歴 34 歳の 2 月より輕度の左腰痛を自覺せるも輕き作業を續行せり。然るに 35 歳の 5 月中旬頃 2 回血尿あり。その後續いて 1 回、更に 10 月下旬にも 1 回の血尿を見にり。爾後左側季肋部に鈍痛ありたるも、該部に腫瘤の存在を認めず。全身倦怠は日と共に増惡、入院時所見、體格中等、榮養中等、體溫 37 度、脈膊 90、血壓 145~70、咳嗽喀痰共に僅少、心濁音界心音等に著變なし。

肺臓 左肺尖部及び左側前胸下部稍々短調にして呼吸音弱、囉音聴取困難、左側背下部呼吸音弱。

肺臓レントゲン所見。左上葉の増殖性陰影、左上葉に肋膜癒着、左横隔膜水平陰影、右上中葉間肋膜陰影等の所見あり。

腹部 平坦にして左腎臓觸れざるも稍々壓痛あり、肝臓に著變なし、睪丸、副睪丸、攝護腺正常、膀胱部異常なし、ワッセルマン氏反應陰性、血液所見、赤血球數 482 萬、白血球數 7420、血色素量 98% (ザーリー)

白血球百分率 エオジン嗜好 1.5%、分葉核白血球 75.5%、桿狀核白血球 8.5%、リンパ球 9.0%、單核細胞 5.5%。

血沈 1 時間 19 耗、2 時間 47 耗。

尿所見 鮮紅色、中等度濁濁、酸性、蛋白 (+)、沈渣には赤血球(卅)、白血球(+), 腎上皮細胞(+), 結核菌(-), 培養は岡、片倉増地

にて陰性、動物實驗鼠にて陰性。

膀胱鏡検査所見 膀胱容量 200 cc 以上、膀胱粘膜正常、血管走行良好、結核潰瘍結節認めず、結石異物認めず、輸尿管口は左右正常位、形縮、紡錘形、收縮運動右正常、左遲鈍。

尿放出右良好左稍く不良。

輸尿管カテーテル挿入兩側共容易。

インデゴカルミン排出試験 右腎 2 分 55 秒で排出開始、5 分 30 秒にて深青排出。左腎 8 分 30 秒で排出、開始後 11 分に至るも深青色とならず。著明な左腎機能の低下を認む。

左右腎分離尿所見 右腎よりの尿には全く變化なきも、左側よりのものは、黄褐色、輕濁、酸性、蛋白(+)、赤血球(+), 白血球(++)、腎上皮細胞(++)、結核菌(-)。

逆行性ピエログラム所見 右腎、第 1 腰椎中間部に上極あり、下極は第 4 腰椎横突起の中間に及ぶ腎盂、腎盞の形狀及邊緣は明確にして異常なし。左腎、腎盂腎盞は極めて擴張す。但し腎盂腎盞のコンツールは明確にして腎結核の如き崩壊像は不明瞭。

靜脈性ピエログラム所見 右腎盂及輸尿管像正常、左腎盂及輸尿管は多少擴大の狀態を呈す。腎實質部には著明な病變認めず。

腎臟機能検査

(イ) 水試験 尿量午前 8 時—正午 492 ㄔ、正午—午後 8 時 532 ㄔ、計 1024 ㄔ、比重差

1002 乃至 1022 即ち 20 を示せり。

(ロ) フェノールズルフォンフタレイン試験 1 時間目 58%, 2 時間目 14%, 計 72%。

斯くて右腎は全く健康にして左側を剔出し得べきを知りたるを以て 11 月 6 日之を實施せり剔出腎所見、重さ 200 瓦、大さ、長徑 13 糎、横徑 7.5 糎、厚さ 5.0 糎、腎の實質は全く健全にして腎盂から輸尿管に移行する部より輸尿管は太くなり、殊に移行部は小豆大に結節狀を呈す。其の先は彌蔓性に擴張せり、小豆大の結節を取り檢鏡せしに粘膜、ことに重層扁平上皮は極度に増殖し、ことに紡錘狀、圓柱狀の細胞が腔内に向つて、増生せる變化が見られ間質は結締組織で突出し、其の間質を取り圍む、此の増生せる扁平上皮が一部肺胞狀を呈せり。固有膜及び筋層には大なる變化なし。

以上の所見より乳嚢腫の極めて初期と診斷す術後経過は良好にして 2 週間後には尿は全く正常に復し 50 日後には全治退院せり。

参 考 文 献

- 1) 細 田：日本内科學會雜誌 34 卷 2 號
- 2) 陳 ：醫學と生物學 11 卷 4 號
- 3) 金 子：手 術 2 卷 4 號
- 4) 高 橋：治療及處方 20 卷 227 號
- 5) 市 川：治療及處方 23 卷 273 號
- 6) 尾 關：治療及處方 15 卷 173 號

第 1 回日本醫科大學基礎醫學談話會

基礎各教室の總意により毎月 1 回談話會を持つことになり、その第 1 回は、6 月 28 日、午後 4 時半より 6 時半迄、學部第 2 講堂に於て行はれ、下記の報告があつた。

オレイン酸ソーダによる溶血

生理學教室助手 藤澤 正輝

オレイン酸ソーダによる溶血は低滲透壓の場合と異り、用いた血球浮遊液の濃度（從つて血球數）によつて異り、實驗によれば、一定温度、一定時間に

溶血する爲の濃度を C 、血球數を N とすれば

$$C = C_0 + AN \dots\dots\dots (1)$$

となり直線關係になる。この A は 1 個の血球に吸着する量であるとするれば、血球を取巻く溶液に残つたオレイン酸ソーダ濃度 C_0 はであると考えてよく血球に吸着した量は C_0 と吸着平衡にあるわけで、之に Freundlich の恒溫吸着式を適用して見れば

$$A = \alpha C_0^{\frac{1}{n}} \quad (n=1\sim 10) \dots\dots\dots (2)$$

となる。こゝに α 、及び n は恒數である。